

第12号

定価一年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む



発行

檜山教職員組合

〒043-0056 江差町字陣屋町 86-1
Tel 0139(52)0858 FAX(52)1490
発行責任者 白山 尚
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

願いいま結実のとき

管内署名教育署 2145筆

ゆきとどいた教育を求める全
国署名が11月末日までに檜山教
組扱いで2千145筆が集約さ
れました。管内各町の教職員、
保護者、地域住民などから広く
寄せられたものです。

署名は、12月6日の全国集約
集会と19日の全道集約集会にそ
れぞれ届けられます。その後、
国会と道議会に提出される予定
です。

新型コロナウイルスの感染拡大が再燃
し、止まりません。子どもたち
の安全・安心を確保する上で
も、思い切った少人数学級化は
切実です。また、子どもたち一
人ひとりを大切にする教育や、
「主体的な学び」「対話的な学
び」「深い学び」を保障する上
でも必須です。

「少人数化を求める教育研究
者有志」は緊急パンフを作成し、

新型コロナの危険の中で学
ぶために、
少人数学級と
学校生活を
豊かな



「少人数学級化を求める教育研究者有志」が緊急パンフレットを作成。専門的見地から少人数学級の効果、実施の手順、学校の働き方の改善などを分かりやすく解説します。

公式ツイッター「#コロナ時代に少人数学級を(署名)」からダウンロードできます。

1年単位変形労働時間制

条例案採決の局面 議員に緊急要請

山組
檜教

道教委は11月25日、公立学
校に「1年単位の変形労働時
間制」を導入するための給特
条例改定案を道議会に提出し
ました。国が「まずは、各学
校で検討」と示した手続きを
経ることなく、現場教職員の
声を無視した「意向調査」に
もとづく強行です。
全国的にみても12月議会で
条例提案するのは北海道に続
く徳島県が表明するのみで、
道教委の性急さは際だってい
ます。北海道が全国に先がけ
て悪しき前例をつくるという
ことにもなり、由々しき事態
です。
同条例案は、12月10日の文
教委員会での審議を経て翌11
日の本会議で採決に付される
予定です。全国・全道の教職
員組合が条例可決を止めるた
めの要請を道議会に行ってい
ます。檜山教組も1日、道議

誰でも利用できるよう公開して
います。それによれば、公立小
学校の平均学級規模は、OEC
D平均で20人ほどですが、日本
は27人ほどで最多です。同パン
フでは、当面30人学級を実現し、
さらに20人学級へと進む展望と
方策を明らかにしています。
また、少人数学級の効果につ
いても最近の研究成果を紐解き
ながら、子どもの人間形成や学
習成果に及ぼす影響を解明して
います。
パンフは、国際的にも異常と
言われる日本の教員の長時間労
働を取り上げ、抜本的な定数改
善と待遇改善を訴えます。校内
の教員配置について校長裁量で
運用できる仕組みも提案します。
文科省が標準法の改正も視野
に少人数指導について来年度予
算要求に盛り込み、国会審議で
も萩生田文科大臣が「不転の
決意で臨む」と表明しました。

ご協力ありがとうございました

コロナ危機と子どももの教育と



檜山教組評議委員会オンライン開催

檜山教組は11月27日、今年度の評議委員会をオン
ラインで開催しました。各町支部から選出された
評議委員が討論し、子どもや現場の様子、とりくみや課題などについて活発に交流しました。感染が拡大するなか、先の見通しが立たない不安や困惑、対応の苦勞が語られました。とくに奥尻の状況について要望に応じていくことの重要性和緊急性が確認されました。また、子どもの成長に寄せた現場の苦勞や工夫も交流され、教訓を共有しました。
コロナ危機に向き合いながら子どものための教育と学校の在り方を見据えていこうとする当面方針を採択しました。(次号で詳細をお伝えします)

「研究者有志」の世話人を務
める東京都立大名誉教授の乾彰
夫氏は、「今が正念場。必ず実現
を」と呼びかけます。
特別支援学校にだけない設置
基準を求める声も高まり、中教
審が策定を求め、文科大臣も「必
要だ」と答弁するにいたってい
ます。
こうした動きは、長年の要求
運動の成果です。教育署名運動
もその一翼を担ってきました。
一方、コロナ禍のなか、子育
と教育をめぐる困難が深刻化
しています。新たな前進に確信
を寄せながら、今、願いを結実
させるときです。ご協力に感謝
し、さらに奮闘する決意です。

2020檜山合研地域別集会 実践報告より



感染症の歴史調べから劇へ



創作劇に挑む子どもたち。「なりきって演じた」と振り返ります。歴史を生きる人々への理解がいつそう深まっています。

上ノ国小学校 山根里美さん

「たが、コロナ禍で合唱の練習もできない。でも、この歌はどこかで流したい。そこで、エンディングロールのような映像にして、劇後に流すことにした。私には映像加工の技術はないので、元担任であり、今も授業に入ってくれている渡邊洋一先生に頼む。使ってほしい写真や入れたい言葉をまとめて、さっそく作業に取りかかってくれた。そして、私がイメージするよりうんと素敵な映像に仕上がってくれた。

配役をイメージしながらシナリオを作ったが、子どもたちに「誰が演じたいか」と思っか？」「自分はこの役を演じてみたいか？」アンケートをとった。子どもたちの意見や希望と私の考えをすり合わせながら、配役を決めた。実際の練習を始めたのは、本番三週間前。さっそく場面ごとに分かれて、読み合わせをする。調べたことが土台になっているので、役の人物像を理解するのが早かった。どんなふうに進むか、より伝わるか、笑いを誘う場面の子たちは思い切って演じ、当時の人々の辛さを表現する場面では真剣に演じていた。

その日の午前中に最後の練習を行った。そこで、渡邊先生からのサプライズ。最後の映像を流すと、途中から違う映像になっている。本番は金曜日の午後。何事かと食い入るように見る子どもたちと山根。そこには、これから本番を迎える子どもたちに、渡邊先生からの温かい励ましのメッセージや、低学年の頃やんちゃだったみんなが、学習発表会の花形である6年生の劇を見事に演じるまでに成長したことが分かるような映像が、懐かしの写真とともに流れた。アクションしながら嬉

6年生と学ぶ「総合的な学習」「国語」「三二発表会」

しそこに画面を見つめる子どもたち。号泣している子も何人かいた。

演じて深まる歴史認識と人間理解

おうちの方々が見守る中、最高の演技を披露した子どもたちに、今回の学習を改めて振り返ってもらった。子どもたちの綴りを紹介したい。

コロナウイルスでうんざりしている中でスペイン風邪の劇をやると知ったとき、正直あまりやる気ではなかった。でも、自分で調べたり、学芸員さんから教わったりしたこと、昔の人たちが今よりも大変な状況の中で前向きに強く生きていたことを知り、自分たちも前向きに生きようと、そして「この劇でこのことを伝えたい」そう思えた。

今の人たちよりも、苦しくて大変だったと思う。今とは違って、お金がなかったり、車がなかったりするから、医者も来られなかったらどうし、救えなかった命が多かったと思う。この石碑によって、昔に起きたことが現在まで伝わっているから、あの石碑は、これからの未来も大事にしておきたいと思った。

スペイン風邪では、上ノ国で116名も亡くなって、すごく悲しい出来事でした。そのことを母さんたちに余すことなく伝えました。改めておれたちのひいひいおじいちゃん、おばあちゃん、これに苦しめられてたのかもしれないと思うと心苦しいです。だから、スペイン風邪のことを教えてくれた学芸員さんのおかげで、今のコロナウイルスの対策をがんばろうと思いました。

こんなにもこの子たちのことを大事に思ってくれている先生がいる。私も嬉しかった。「渡邊先生の素敵な贈り物にどう応えるかは、それぞれ本番で見せてください」と言ってくれた本番を迎えた。

100年前のスペイン風邪はコロナよりひどくて人々は苦しめられたんだろうな...と考えると、こわいです。そのことを劇にした「祈りの石碑」を演じるためには、山根先生や松尾先生がなりきることが大事だと言ってください。だから、100年前の人になって（なまり方）演じた。あと、スペイン風邪のことをくわしく教えてくれた塚田さん・熊谷さんには、本当にありがたく思っています。ぼくたちが知らないスペイン風邪のことを教えてくれたから劇だから、とても良い思い出になったと思う。

スペイン風邪が流行ったのは、1919～1921年で、上ノ国にスペイン風邪が来たのは1921年と少し遅い。もしかしたら、コロナも2021年に上ノ国ではやるかもしれないと心の中で僕は思っていました。でも、そうならないために、昔のように予防していこうと思いました。



発表を終え、参観者にむかってあいさつする子どもたち

私はコロナが史上最悪な病気だと思っていたけど、スペイン風邪も苦しんだことを知り、あらためて病気のおそろしさというものを知りました。私たちが経験したコロナも時間がたてば「令和にコロナってものが流行ったんですよ」と言われるのになって考えたこともあった。私たちが経験したことは、きっと未来で役にたっていると思います。石碑のことは、もっと知らせて方がよいと思うな。

重ねて考えると、コロナもそのうち上ノ国ではやるんじゃないかと不安になった。でも、当時の人々は、がんばってスペイン風邪を乗り切ったんだと思うと、少し不安が消えて、「やってやる」みたいな気分になった。スペイン風邪にかかった人も、かかっていない人も、どちらも悲しいし、苦しかったと思う。千代のセリフの通り、自分もスペイン風邪で亡くなった人の分も生きて、コロナを乗り切ろうと思えた劇だった。

今、新型コロナウイルスで世界中の人々が悲しんだり、苦しんだりしている中、この100年前の出来事を知り、当時はどう乗り越えたのかを調べた。今は外出もなるべくひかえ、旅行もしづらく、あきらめかけている人が多いけど、「始まりがあれば、いつか終わりが来る」というように前向きに考え、100年前の方々が乗り越えたように自分たちもそれぞれできる限りのことをして強く乗り越えられる努力をしたい。

嘆きながら生きて

「笑いあり、涙ありの劇」という方向性が決まり、それであれば命をテーマにした劇にしたいなと考えていた。いじめ・戦争・白血病：何を元にと子どもたちに命について考えさせるか、いろいろ悩み、そこから先はしばらく進まなかつ

た。そうこうしているうちに「コロナが広がり始め、休校になり...」。そんなときに目にしたのが、上ノ国町広報誌5月号。上ノ国寺の石碑のことが紹介されていた。「このことを子どもたちと学んでみたい」とすぐに思った。そして、学校が再開し、子どもたちの感染症調べが始まった。子どもたちを石碑に出あわせることもできた。でも、このときは、まだ劇にしようとは考えていなかった。学芸員さんから話を聞いたとき、実際に上ノ国で悩み苦しんだ人々の様子が見えてきた。このことをまとめて誰かに伝える必要がある。どうまとめたらよいか？ 模造紙にまとめて掲示する？ 新聞にして掲示する？ いや、より多くの人に伝えられるのは劇だ！と、ようやくそこできつな

子どもたちの振り返りにもあったが、「悩み苦しみなから乗り越えてきたこと」は、伝えていく必要があると思う。スペイン風邪のことでもコロナのことでも。人は、過去から学び未来へ生かしていくということを繰り返している。歴史をなぜ学ぶのか？ そんなことに結びつけて、子どもたちが考えてくれたらいいなと思う。

子どもたちが満足できる劇に仕上げられたのは、松尾先生、渡邊先生の協力も大きい。一人では難しくても、複数で関われば、できる幅が広がり、よりよいものになる。子どもたちにより良い学びをさせるために、大事にしたいことだ。

制限され、今まで通りのことができない状況を嘆いてばかりいられない。この状況をうまく利用して、学びにつなげる。コロナに負けていられない。

(終わり)